

後援会法人会員

探訪



後援会法人会員である法人様を訪問し、お話を伺いました。

FOCUS

社会福祉法人
福寿園

後援会法人会員

TOP INTERVIEW



創始者の想いが詰まった、「しあわせを感じてもらえる場」を。

やまだ こうぞう
山田 浩三
理事長

たくさんのご縁に支えられ、歩んできた38年。

当法人はおかげさまで創立38周年を迎え、現在は田原市のほか豊田市、武豊町、豊橋市、半田市、東海市、知多市と7つの市町にまたがる18施設を運営しています。創始者は、私の母である山田都企子です。母は10歳の頃、「大人になったらお金を貯め、障がいを持つ人たちが生活できる大きな家をつくってお母さんになりたい」という夢を持つようになりました。そのきっかけは、病気で片足を切断せざるを得なくなった実兄の存在。当時は「福祉」への理解が全くない時代ですから、周囲から蔑まれ、相当つらい思いをしたと聞きました。夢を抱き続けた母は、50歳を過ぎた1980年に全国でも珍しかった視覚障がいの者専門施設、養護盲老人ホームを田原市に開設。

長年の夢を実現したのです。それから紆余曲折。「ここに来る方々にしあわせと感じてもらえる場にしたい」という創始の心に基づいたサービスを評価いただくとともに、たくさんのご縁に恵まれ、今日までやって来られたのだと感謝の思いでいっぱいです。

わが家にいるかのような、安心感と心地よさの工夫。

創始の心をカタチにする中で、特に力を入れているのは「食事」と「認知症ケア」です。この2つは、福寿園ブランドとして広く発信していけたらと考えています。まず食事については、「家庭的であたたかい食事づくり」をモットーに、全施設に管理栄養士と調理員を配置し、献立作成から調理まですべて自前で行っています。季節を感

じられる旬の食材を多く使用し、食材に合わせて味付けにもひと工夫。そして温かいものは温かく、冷たいものは冷たいうちに提供しています。さらに配膳にもこだわり、食器は色とりどりの瀬戸物を使用。破損のリスクもありますが、プラスチック製では味わえない温もりがあると喜びの声をいただいています。もちろん行事食も多彩で、元旦にはおせち料理をつくり、一人ひとりの重箱に盛り付けて提供しています。このように



レシピ本のほか、スタッフ・利用者の生の声を集めた書籍を発行

社会福祉法人 福寿園

- 〒441-3413 愛知県田原市六連町神ノ釜9-3
TEL(0531)-27-0008
- 創業:1980年5月
- 従業員数:1550人※平成30年11月時点
- 事業内容:
 - 施設サービス事業(介護老人福祉施設/特別養護老人ホーム、養護(盲)老人ホーム、ケアハウス)
 - 在宅サービス事業(短期入所生活介護/ショートステイ、通所介護/デイサービス、訪問介護/ホームヘルプ、訪問入浴介護/入浴サービス、居宅介護支援/ケアプラン、グループホーム)
 - その他のサービス(地域包括支援センター、サービス付き高齢者向け住宅)
 - 障がい者支援事業(就労継続支援センター、グループホーム)



積み重ねてきたノウハウを集めたオリジナルレシピ本も自主発行し、こちらも大変好評いただいています。

一方の認知症ケアについては、独自で認知症ケア研究委員会を設置し、「どうしたらより良いサービスの提供ができるのか」を日々追求しています。認知症ケアは学術的なものがなく、一人ひとりの症状に合わせた個別の対応が大切です。実践を繰り返す中で高めていくしかありません。現在は認知症ケアマッピングを定期的に開催し、現場のケアを確認しながら、ユマニチュードの導入に努めています。机上論だけでなく、現場の職員が、自らのケアを自己覚知するプロセスを踏むことが大切です。

増える外国人労働者のサポート体制も強化。

ここ数年で大きく変わったことといえば、職場のグローバル化です。その発端となったのが、経済連携協定(以下、EPA)に基づく外国人介護福祉士候補者の受け入れ。今ではどの業界も人手不足といわれますが、介護業界は10年前から人材確保が非常に難しくなりました。そうした背景もあり、私たちは他に先駆けて、2010年よりフィリピン、2014年よりベトナムの方を受け入れており、以降、毎年10名から20名の受け入れをしています。それだけではなく、2015年からはフィリピンのミンダナオ国際大学と提携し、大学内に「福寿園クラス」を開講しました。EPAによる受け入れの場合、ほとんどが来日してから日本語を勉強し始めますが、言葉の壁は想像以上に高いものです。そこで、福寿園クラスではフィリピンにしながら日本語と初歩的な介護技術、日本の文化を学べるカリキュラムを用意しました。

教師は現地の大学職員の方に加え、当法人の職員を派遣し対応しています。当法人の事業規模を上回る大きな取り組みですが、志願者数も上々で、2018年度は福寿園クラスから留学生として来る方と、EPAを通して入職する方合わせて90人ほどになりました。さらに新たな技能実習生の枠でも、受け入れを検討しています。当然ながら、日本人職員に対する研修制度も手厚く行っています。新人職員研修はホテルを貸し切った3泊4日のプログラムで、仕事の基盤となる制度の習得をはじめ、介護技術、経営理念の理解などを集中的に学びます。外部講師を招くのは、接遇・マナーの部分のみで、それ以外は当法人の役員や職員が講師を務めるというのも特長。講義をする側になって得るものも大きいので、そういった機会も大事にしています。



笑顔で声かけをする外国人職員

「しあわせ」を生み出す、小さな気づきをこれからも。

今も昔も介護職員に求められるものは、知識、技術、感性の3つだと感じています。特に相手が何を求めているのか分かる、相手の痛みが分かるといった感性の部分が重要ではないでしょうか。ほんの少しのことに気づけるかどうかで、大きな差が生まれますから。そうした「気づき」を当法人でも職員に啓蒙しており、「気づきメモ」と



日々の業務で気づいたことを書き留めた「気づきメモ」

いう取り組みを行っています。これは、利用者さんと接する中で気づいたことを書くのですが、中には一人で100件以上出してくれる職員もいるほど。こうした感性の部分を、学生時代に身に付けた人は強いと思いますね。今や、世の中の仕組みそのものがグローバルな時代。私たちが全く同じで、福祉施設の社会福祉法人ですが、さまざまな連携なくしては発展を図れないと実感しています。たとえば地域との連携、さらには大勢の卒業生を出していただいている日本福祉大学のような学校との連携によって、我々と違った知識やノウハウ、発想という刺激を与えてもらえます。「福祉」という言葉を辞書で引くと、「しあわせ」と書いてありますよね。つまり、日本福祉大学は「人のしあわせを教える大学」。そう考えると、当法人と究極の価値観はほぼ変わりませんし、接点がたくさんあります。ぜひ今後とも幅広い連携と交流を図り、互いに高めあっていきましょう。

